
東方永証録

ちょもより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方永証録

【Nコード】

N8296Y

【作者名】

ちよもより

【あらすじ】

事故つて、幻想入りした高2の落合透弥はとてつもない能力を持っている。

幻想郷の人間・妖・妖精と出会い、様々な事件や事故+異変!?!に干渉することになる。

透弥はどうなるのだろうかね?!

幻想入り(前書き)

キャラ崩壊・原作と違う・主人公がチート
と、いったものが不快な方は、あまり閲覧をオススメしません

幻想入り

それは、告る 断られる 落ち込む 憂鬱

という、4コンボを叩き込まれた1週間後の事だった。

をまだ引きずった今の俺、落合透弥は高校2年生で特にいいところもなく成績は上の中程度だが、スポーツは下の中といったところ。後、1つ言うなら動体視力がおかしいこと、おかしいと言っても常人の20倍以上はあるぐらいでそれに体が追いついてこないぐらいの力しかない。

まあ、俺の個人情報なんてどうでもいい。

結論から言おう。

事故りそうwww

と、言っても今その真っ最中で軽く鬱状態の俺は信号無視したからね・・・

右から迫るトラックに気づかず、やっと分かったのは、トラックを俺の距離が3mぐらいになった時。

だが、トラックはスローモーションに見える。けど体もスローモ

シヨン。

無我夢中で、手をトラックの方に出した。

それで、止まるはずはない。

分かってはいるが、人間の本能は自分の命を自分の体を犠牲にしようとしている。

ドゴツ、と、いう鈍い音が響く。

後ろへかなり吹き飛ばされた事だけ分かって、そこで世界は暗くなつた。

「……から、頑張つてね？」

誰だ？と、体を起こしてみようとする。

「いつつ！」

体が悲鳴を上げているのが分かる。

しばらくして、ようやく体に自由が戻ってきた。

周りを見渡すと一面の草原だった・・・

「え！？、ちよ、ここどこ？」

冷静になれ、冷静になれ、と繰り返す。

俺はさつき、事故って吹き飛ばされて・・・ああ、後ろから誰かの声が聞こえて気づいたらここだったのか・・・

神様あ？え、お、俺、別にこんな事望んでないよー！！？、いや、普通に一般人の生活で良かったんだけど。

嘆いても、仕方がないので、とりあえず周りに何かないか探してみる。

この時、迂闊に動かなきゃ良かったと、後悔した。

幻想入り（後書き）

どうでしょうか？

初投稿です。

初とか気にしなくていいし厳しいのでも構いません。
意見・要望など、どんどん教えてください。

俺って能力持ち？（前書き）

更新遅れてすいません

言い訳ができるような身分ではないので黙々と巻き返しを図って行きたいと思います。

と、言う訳で、今回は透弥の能力がね……

俺って能力持ち？

誰かいませんかー、と叫び続けて、もう4時間ぐらい経っただろうか？

もう足はもつれて、喉も叫び過ぎで炎症が起きていることだろう。だが、この作業をやめる訳にはいかない。

なぜなら、この行為が今、唯一の安全を確保することに繋がることだからだ。

「誰か………いません…ゴホッ…居ませんか……？」

頭では、分かっている。

ここは辺り一面の小麦畑となっている。

つまり、ここ一帯は農家とかの広大な土地で、手入れを細かくやるような広さではない。

まあ、あまり人が来ない、ということだろう。

「H A H A H A ……もう駄目みたいだ………」

そこで、世界はブラックアウトした。

はいいー、起きたー！

が…

もう、どうしようもありません。

短い人生でした。……悔いは……めっちゃあるんだけど……！！

簡潔に説明しよう。

私こと、落合透弥は、命の危険にさらされているのだ……

目の前には蜘蛛が居る。と言っても、ただの蜘蛛ではない。

俺は身長が178cmあるのだが、この俺の3倍はあろうかと言う大きな大きな蜘蛛。

あと分かることは、もう、この今いる世界が今まで俺がいた世界ではないこと……

なんと言うか……妖気、とても言おうか、蜘蛛から出ているその気配、いや、空気が違う。

ただ、その場に居るだけで息苦しい、そんな空気で満たされている。

「マジかよ……」

もう、蜘蛛はすぐそこまで迫って来ている。

蜘蛛の腕には大きな鎌が付いている。その鎌を大きく振り上げて近づいてくる。

蜘蛛の大きな鎌が降り下ろされる

目をつぶって、死を覚悟したその時だった

バチイイイ、と破裂音が鳴り響く

いつまで経っても何も起きない事を不自然に思っておそろおそろ目を開けてみる。

すると、鎌が無い蜘蛛の後ろ姿が遠ざかって行った。

「助かった……………のか？」

ええ、はい、助かりました。

緊張が溶けて、腹が減って来たよ。

まあ、そのあと、食べられそうな木の实があつたんで助かったが…

俺って能力持ち？（後書き）

いや、難しい。うん、難しい。

あと、作者は東方をやっていますが、公式設定？なにそれ？食べられるの？

と、いう人間ですので、多少の事は脳内補完でお願いします

ご意見、指摘、お待ちしております！

やったぜ！集落発見だZEE！（前書き）

やっと透弥が暮らせます

きたのはいいんですが展開を迷っています

どーしよーかなー、こーしよーかなー…

すいませんふざけました。

あと、話に現世が絡んできます。

現世は今後の布石なので…

やったぜ！集落発見だZE！

あの蜘蛛を撃退してから、どんどん良い事が続く。

まず、かなり美味しい木の実を見つけた。次にかなりの清流があつて、水も確保出来た。今度は、木に刺さっている剣を見つけた。すると、狩りが出来るようになった。火も起こせるようになった。

けど、気づくと、もうこっちに来てから3日経ってしまった。

今は春休みで、2年生とは言っているが、まだ1年だ。

いや、1年の修了証書？みたいなやつ貰ったから、2年生だい！べ、別に後輩が楽しみな訳じゃ無いんだからねっ！

しかし、春休みはあと、約1ヶ月だ。その間に戻らなくては…

一昨日捕まえた鹿の干肉にかぶりつく

普通は1日じゃ出来ない？うん、そうですね。でも、なんか「時が早くなればなあ」なんて考えたら、なっちゃったんだよ。

もしかして、俺ってなんかの能力あるのかな？

一応、簡単な寝る所は作ったし、生活できるのだが…これって、縄文時代並みの生活だな！オイ！

ちなみに俺の一日スケジュールがこんな感じ

6:00 起床

6:30 朝飯

11:00 誰か居ないか

12:30 狩りでもしますか

13:00 昼飯だZ E!

15:00 収穫を保存食TYPEにする

16:00 剣術なんかやっちゃおっと

18:15 火起こしするだお

19:00 晩飯

20:00 たいまつ、弓、矢を作る

寝る(- -)。 z z z ……

……うん、縄文時代だね……

「なんだか、悲しくなって来たよ」

だんだんと日は昇ってきて、かなり明るくなってきたので…

「おしつ、今日は頑張ってみますか。」

腰を上げて、剣を腰に通して、弓を矢受けを背中にかける。また、動物の皮で作った袋に、干肉やドライフルーツを詰める。

なんで、肉や果物を持ってくかって？

そりゃ、………村が見つかった時に有利になるためだ。

昨日は家、というか、小屋を作るのに精一杯だったが、今日は活動範囲を広げてみる。

活動範囲といっても、家から煙を上げて、それが見える範囲だけど…

〱青年探索中〱

「マジか…………、でも、一応村は見つかったよな…………」

なんとなく安心する

だが、考えていた、最悪の状況にもなった。

透弥が見据えているその村。それは、誰でも学校で習った事のある
だろっ縄文時代の暮らし。そのものなのだ。

「なんとなく、分かってたけど…………、これは」

さようなら平成、俺の日常。こんにちは縄文時代、狩りの暮らし

その村の守りが固い。と、言ってもかなりの大きさの村でその周りを
囲うようにして木で壁を作っている。

さらには、入口らしい所に門番が4人ほど立っている。

かくして、村に近づくとあからさまに敵意を向けられている。

「ふう、こりゃどうなるか…」

ビビっては負けだ。だが、旅人を装って入る事にしたので、それっぽいい訳と、弱い物腰で行くことにした。

「おい、貴様。ここに何の用だ。」

声に重いドスを利かせて1人のリーダー格っぽい人が出てきた。

「いえ、怪しい者ではございません。旅の者です」

「名を名乗れ」

「はい、落合透弥、と申します」

「ふむ。では、改めて何の用だ。落合透弥よ」

「自分の村は余り栄えてなくて、老婦人に苦渋の生活を強いれてしまっているのです」

「ですから、旅をして負担をかけない生活の方法を探しているので
す」

「なるほど」

リーダー格の男は納得したのだろう。腕を前で組んで、ふむ、と言っている。

「で、ずうずうしいのを承知でお願いしますが……」

「ここで、少し焦らす……」

「なんだ、早く申してみい」

キタ　　（。。。）　　！！……やはり、やはりなあ！俺って結構、人扱うの得意かも

「では……、どうか、この私を少しでいいのでこの村に泊めていただけないでしょうか？」

そこで、後ろの兵がこそこそと話をしているのが目についた

「あれは、妖怪じゃないのか？」

「服も変わっているしなあ」

「最近は何妖怪も多いし、どうだかなあ」

……ああ、なるほど。だからこんなに守りが固いのか。

まあ、とっておきを使っけどね。

「もちろんタダでなんて申しません。まずはこれをどうぞ」

と、いって腰に下げている干肉を少し手渡した。

「なんだこれは？」

まあ、そりゃそうだよな。干肉なんて、まだできないだろうし……

「鹿の干肉です」

「」「」「干肉？」「」「」

「はい、肉を長くとって置けるようにしたものです」

カリッ！

「むっ、なかなか美味しいな」

「この技術は、自分の親父が作ったもので、これを村で出来るのは……もう自分だけです」

「!.....」

「そう、か。そうなのか、いや、疑ったりしてすまなかった。」

「いえ、で、泊めて頂ければ、この技術をお教えします」

「!..、そうかそうか、だが、まずは村長に話を付けなくては……」

「お願いします」

く、透弥は交渉権を手に入れた

頭の中で奇妙なナレーションが聞こえたのは気のせい……

やったぜ！集落発見だZEE！（後書き）

まあ、そろそろ東方キャラ絡みを出そう、と思います。

意見、感想お待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8296y/>

東方永証録

2011年12月24日08時50分発行